

仲仕組創立紀念之碑」解釈

石碑の風化が著しく、欠落し判読不能の文字が多数あり解読は極めて困難です。今後不明文字が明らかになればより正確な解釈がなされると思います。
●は欠落などで判読不能な文字、○は不鮮明で推測した文字です。

「仲仕組創立紀念之碑」碑文

明治三十年秋九月鐵路竣工汽車始通爾來汽運一變千里比

隣旅客來往物貨輸滂寂寥之地忽化而為繁華之區實是昭代

之賜也可不謂傳矣績於是碑際所鑄諸子祭

之中糾合同志而六十有預餘創設仲仕組從事物貨運輸之

五年茲矣商賈賴其遠近集便宜乎業務日進月踰其

驗々乎不止獨我地方之大士不知應用文明之利器而殖產

興業所以報國家倫安送日者集何哉希視諸士之可亦以

少愧矣夫人勞心之與勞力二者雖殊所以其端國家一也

與所而無慙焉何暇論心身之優劣余將刻同志姓名於石而

傳千古何不可也銘曰

鑿山架水 鐵路完成 飛烟汽笛 瞬開車輶 記參六十

欲開明 運物輸貨 ●日榮 屹一片石 ●留名

明治三十四年夏七月 ●● 鷗村 小史 撰

解釈 傍線部分は不明文字が多く、前後の文脈からの創作)

明治三十年秋九月鐵路竣工瀕車始通爾來一變千里比隣旅客來往
物資輻湊

※千里比隣・遠く離れた地が近くに感ずる。輻湊・・・四方から集まること。
解釈 明治三十年の秋九月鐵路竣工。汽車が通り始めて状況が一変、以来遠隔
地も近くとなり旅客が往來し物貨が集まるようになった。

寂寥之地忽化而為繁華之區實是昭代之賜也可不謂傳矣

※昭代・繁榮する御代

解釈 寂寥の地が 鉄道開通により) 忽ち化して繁華の地と為す。このことは
實に繁榮する御代 (昭代) の賜と謂えよう。

績於是碑際所鑿 鑿る 諸子 察 大 中

※績・業績 鑿・掘る。

解釈 諸君が時代の变革を洞察し、為すべき大きな務めを果たそうとする績を
碑に刻む。これらのうち

糾合同志而六十有餘創設仲仕組従事物貨運輸之五年茲

(・●五年●茲・・・は解読できず。あるいは明治三十年金津駅開業、以

來五年の歳月を費やしてとの意味か)

解釈 志を同じにする者六十有余を糾合し仲仕組を創設、物貨運輸に従事せん
とすることに五年の歳月を費やしたが、茲に成し遂げた。

商賈頼其遠近其便宜乎業務日進月路其

解釈 商賈 運送業を指す) は遠近の集荷を仲仕組に頼ることになり便利にな
った。これから (運送) 業務は日々発展しその勢いは

駸々乎不止獨我地方大士不知應用文明之利器

※大士・有力者。 碑文では事業主。

※応用文明の利器・ 鉄道駅を拠点とした物流システムを指すのか？

解釈 速やかであり止まらず。我が地方の事業主はこの文明の利器の応用 鐵道に適應した運送)に慣れぬが、

而殖産興業所以報國家倫安送日者集何哉希視諸子之可
解釈 しかしながら安らかな運送で日頃より集荷する諸君の働きは希に視るべきで國家に報いる倫である。ゆえに 運送業は) 殖産興業と云えよう。

亦以少愧矣夫の勞心與勞力二者雖殊所以其端國家一也
與所●而無慙焉何論暇心身之優劣余將刻同志姓名於石而
よるせらろ むざんいずくんぞなんのろんずるいとましんしんこれゆうれつ まさにきざむどうしせいめい いし

※少愧・少しも恥じることはない、転じて誇りとする。

※勞心・頭腦労働者。企画立案に従事する者。碑文では提唱者、出資者である設立員、発起人らの幹部を指す。

勞力・肉体労働者。碑文では現場で働く労働者。 現場職)

解釈 又、この業務には幹部と現場労働者の二者があると雖も両者とも その業務を) 誇りとすべきである。なぜなら夫々が國家第一の心に依る所から端を發しているからである。私に両者の心身の 役割) 優劣を論ずる暇 必要) などあるう筈もなく、將に同志の姓名を石碑に

傳千古何不可也銘曰

※千古・永く

解釈 銘し、永く伝えることに何の不都合があるうか。

漢詩

鑿山架水 鐵路完成 飛烟瀟笛 瞬間車輞 記參六十

※記參・・・名を記し参加した者。同志。

解釈 山を鑿ち河に架橋して鐵路が完成した。 烟を飛ばし汽笛をならし 汽車は瞬時に走る。名を連ねた同志六十名は

欲路開明 運物輸貨 ●●日榮 屹一片石 ●●留名

解釈 鐵路が何処までも開かれることを望み 物貨が運輸されて、事業の日々 榮えんことを期待する。 一片の石を屹立して、 同志の名を留める。

明治三十四年夏七月

鷗村 小史

撰

碑文全文 大意

明治三十年秋九月鐵路竣工。汽車が通り始めて状況が一変、以来遠隔地は近くなり旅客が往来し物貨が集まるようになり、寂寥の地が 鉄道開通によって忽ち、繁華の地となった。このことは実に繁栄する御代の賜である。

諸君が時代の変革を洞察し、為すべき大きな務めを果たそうとする績を碑に刻む。これらのうち志を同じにする者六十有余名を糾合し仲仕組を創設、物貨運輸に従事せんとすることに五年の歳月を費やしたが、茲に成し遂げた。

商賣 運送業を指す。は遠近の集荷を仲仕組に頼ることとなり便利になった。これから 運送)業務は日々発展しその勢いは速やかであり止まらないであろう。我が地方の有力者はこの文明の利器の応用 鉄道に適応した運送)に慣れぬが、しかしながら安らかな運送で日頃より集荷する諸君の働きは希に視るべきであり国家に報いる倫である。ゆえに 運送業は)殖産興業と云えよう。

又、この業務には幹部と現場労働者の二者があると雖も両者とも その業務を誇りとすべきである。なぜならそれぞれが国家第一の心に依る所から端を発しているからである。私に両者の心身 役割の)優劣を論ずる暇 必要)などあろう筈も無く、將に同志の姓名を石碑に銘し永く伝えることとする。

漢詩の解釈

山を鑿し河に架橋し、鐵路が完成した。烟を飛ばし、汽笛を鳴らし汽車は瞬時に走る。名を連ねた同志六十名は、鐵路が何処までも開かれることを望み、物貨が運輸されて、事業が日々栄えんことを期待する。一片の石碑を屹立して、同志の名を留める。

明治三十四年夏七月

鷗村 小史 撰

裏面

設立員 (六名)

永岡太助 岡田清五郎 小幡利吉 中山三太郎

保原利左工門 坂森八三郎 野中仁吉 稲田與作

発起人 (六名)

森和四郎 笹岡栄吉 本多宗太郎 稲田三● 端惣太郎 雨谷栄吉

青木真次郎 水野石太郎 八木仙太郎 新田谷初蔵 保原石太郎

水上久四郎 籠島継太郎 野田彦太郎 勝木辰五郎 (岡)田石太郎

中村仁吉 川道●吉 紺井岩(吉) 稲田與吉 杉本初蔵 國本駒吉

中山善太郎 鷺津弥吉 小幡捨吉 稲田伊七 牧野(石)太郎 谷川代太郎

(堂)下(金)之助 坂●●太郎 中山吉松 渡辺末吉 坂戸圭二郎

(稻)田幸太郎 ●●●● 永岡継太郎 兼定藤吉 吉田太作 炭田種吉

大淵利三吉 三輪長蔵 野中茂右郎 丸井三五郎 米沢市蔵 栗山寅吉

中●与三五郎 角初五郎 (坂)本(林)●郎 米沢弥●郎 川(村)三吉

石田金之助 富久太郎 (吉)●●●● (坂)田弥三吉 (保)坂●●●● 稲田●(作)

野沢大吉 稲田亀松

側面に長谷川吉郎 中村與三吉 端藤吉 斉藤助七 他四名 判読不能)
反対側面に建碑地所寄附者の名 林根次郎

この項了。